

## 末法時機相應の實踐的宗教

中澤 ようじ 津

宗教は永遠性を有する即ちつながりであらねばならない、と同時に救済性がなければならぬ。

故に恒に宗教的眞理は何時の時代、如何なる場所にあつても永遠不變なるものである事を要求すると同時に、宇宙の根本的原理でなければならぬのである。この不變眞理の條件に恰當する宗教的觀念形態は常に時代人の要求に適して行くかと云ふに、決して並行的發展は赦されてゐないのである。(即ち救済性の具体的に實踐化せられざる眞理のみの場合)と云つて斯様な永恆的不變眞理は崩壊し去られて終ふものであらうか。否、葬り去らんとして葬り得ざる永遠の眞理なのである。

眞理は永遠の眞理として、宇宙の本質的な實在として存在し、常にその形態は時代民衆の心に低く近い姿で動いて行く所に活きた宗教的生命が存するのであると思ふ。

今天台より日蓮上人の法門が一重立ち入りたる法門なる事は日蓮宗が活動的社會指導原理として生きてゐる所に存すると思ふ。法華經が宇宙の本質的存在たる原理たる事は、迹門理實相即ち理の一念三千觀の原理による一切衆生の佛性禮讚は宗教的原理としての根本要素であるからである。

且て天台が「本門の長壽は祇此れ證體の用」とのべたのを考へても、吾人も少壯純學的要求より考ふれば、或はこれ然らんかと思はれる。

即ち印度出現の釋尊は人壽無常の姿をもつてカピラの王子として誕生遊ばされ、浮世の無常を感じて出家をなし、苦樂十二年の修行の後、ガンヂスの曉の明星に發然開悟、以來五十余年の說法教化であつた。そして最後、拔提河畔の宵の明星と共に淡く果敢なくも散つた應身八十老比丘であつた。それを天台が壽量の文上により、五百塵點有始の佛であると説いた事は應身に即する法身説、即ち正在報身と説いた所の佛にして若し八十の老比丘となられた釋尊が理實相を体得して報身如來とし覺知したとするならば、明かに本門の長壽は證躰の用とならざるを得ぬであらう。然るに本門に於ては五百塵點已前無始無終の本佛禮讚を主となして、迹の理實相たる佛性禮讚はその從として取り扱はれてゐるのは、正しく法華經本門の事の法門が時代人の宗教的觀念に同じたものと見るべきであらう。

即ち迹門理實相の法門によりこの顯現されたる主觀的己心佛が智者學匠の修知すべき觀念形態であるに對して、客觀的本佛の顯現は現實生活の要求として愚者たりとも考へらるべきであると同時に最も凡夫等の弱者に取つて慈悲と救濟を仰ぐには最も近い姿の對象であるからである。

されどこの客觀化した本佛の尊容は徒らに基督教の神の如く神人懸隔であつては價值がない。即ち神人同格の客觀本佛たる事を顯したのが當家の特色である。即ち迹理を本佛に入れて不二となす、始覺即本覺佛の顯現がそれである。

これ高き實在が低い姿で顯れたるものである。此處に彼の法然が台家を駁して理深解微時機失時と貶せし弊を除きしものにして、正に宗祖が末法時機相應化せる當家の本門中心、本佛禮讚思想を高唱せしめたる所以である。故に迹門の理の一念三千は一切衆生皆成の佛種のあることを理的に説明したるに對し、本門思想は本佛が衆生に近い姿で成佛の實踐化を説かれたものであらう。これ當家の受持成佛が最特色として顯れし處である。この思想が佛凡感應一如への行法として、妙法蓮華經の單口唱、單行禮拜(受持一行)を以て結びし事は現代人の要求する宗教的觀念形態であ

と思ふ。故に吾人は現代人を動かす指導原理は徒らに宗教學の組織的大成には非ずして、大聖人の一生涯に於ける一切衆生の口に入れむと勵むと仰せられたる題目宣傳の死身弘法的態度より生れる大慈悲的救濟性でなければならぬ。即ち絶對信の實踐化それこそ宗祖一代の主張にして、そのモットウは絶對慈悲心の發露たる絶對折伏主義であつた。(末法の通判は逆機なる故)されば順縁但信の下機は口唱の實踐的運動(受持一行)を以て成佛への要道となすのである。須らく吾人等は、この宗祖の法華經的絶對折伏の化他的氣魄を眞に自己に體現し、三業受持口唱を以て進む所に既成教團の弊害は除去され、時代人の要求は必然に集り、此處に王佛冥合、事の戒壇建立の曉も近く、皆歸妙法の實現も空想架構に終らないであらう事を信じてペンを止める。

(完)